

授業力は、誰が付ける力だろう。これまで教師が付ける力ととらえていた。だが、教師主体の授業は、「子供同士が学び合い、自ら考え表現しながら本質的な学びを生み出す授業」は出来ないことが明らかになってきた。子供が教師を頼らず仲間と協働して創る授業が出来たとき、はじめて授業は成立する。学習指導要領総則にも「各教科の指導にあたっては、自主的・自発的な学習が促されるように工夫すること。」とある。授業力とは、案外、教師より子供が身に付けるべき力ではないだろうか。そのために授業進行係りを導入するとよい。

- ・子供が主体的・協働的に仲間と学ぶための方策である。
- ・これまでの授業進行係りは、担当の教師から「持ち物や宿題等」を聞き、教室で伝える役割しかなかったので役割の在り方を変える。
- ・教師の独壇場な授業を止める一つの方策として導入をする。

最初は、授業進行係りに多くは望まなかった。だが、子供たちは、授業進行係りが慣れるにしたがって、自分たちで授業を運営したいという思いが強くなってきた。そこで、授業進行係りに複数の授業運営役を任せるようにした。「教えられる授業」から、子供の「自主的、自発的な学習」に変わった。

下記の係りは、今の時点で考えられる係りだ。他にもあるかもしれない。学校で統一し、できるところから始めるとよい。教師が手っ取り早く一人で多弁な授業を行う工夫のない授業を一刻も避けるためにも授業進行係りを導入するとよい。

段 階	係り名	内 容	
授業前	①名札係り	名札の有無の確認、机に名札配布、黒板	
	②授業後の教材掲示係り	使用教材の教室内への掲示	
	③グッズを板書に掲示係り	授業の前に黒板にグッズを貼る	
	④課題の枠とまとめの枠を板書係り	ゴールイメージを持たせるために板書	
授業中	⑤号令係り	始め終了後の挨拶	
	⑥タイマー係り	問題解決学習段階のタイマー	
	⑦司会係り（全体司会者・各学習段階の司会者等）	一人で全部担当・各段階で司会を立てる方法	
	⑧板書係	意見や考察を板書	
	⑨言語わざ係り	本時で強く進める言語活動の言葉の伝達	
	⑩机配置係り	前向きか班会か教室の真ん中を向くのかの指示	
	11 本時の教材掲示係り	資料や学習問題の掲示	
	12 前時の振り返り発表係り	前時の振り返りを発表する	
	13 見通し確認係り	課題解決が可能か、出来ない場合の対応の指示	
	14 教科指導係り（教科得意係り）	課題解決が出来ない子への指導を担当	
	15 班長会	班会で話し合う内容や発表方法の伝達	
	16 班会（司会・ホワイトボード係り・発表者）	班内の係りの指示と解けない子から発表の指示	
	17 ノート・ワークシート係り	ノート展覧会やノーと回しの指示	
	18 参観者への対応係り（お礼の言葉）	授業参観者への歓迎とお礼の挨拶	
	授業後	19 授業評価係り	褒めてアドバイス形式で授業全体の評価
		20 研究協議会への報告係り	代表の子の2名が授業評価の3点を報告
		21 持ち物、宿題等の伝達・宿題収集係り係り	次時の宿題の指示と収集
		22 論文指示配布掲示係り	月に一度は論文を書く指示と収集や掲示

示した授業進行係りのうち、重要と思われる役がある。

- ・⑦司会係り（全体司会者・各学習段階の司会者等）である。これがないと、教師一人が授業を進めてしまう。子供たちが発表した事を聞き、うなずきながら1問1答で進めてしまう方法だ。スモールステップで進めやすくなり、子供主体とはかけ離れてしまう。
- ・20 研究協議会への報告係りである。研究会の冒頭に「報告係り」が、教師からの質問を受ける形で学級全体の学びの報告を行う。教師だけの授業研修というこれまでの既存常識を超え、子供が創る授業となりつつある。これにより、教師の意識が大きく変わってきている。

◎まとめの時期である。結果は残せただろうか。

◎授業を変えれば、子供に力がつく。自らが変われば、子供が成長する。

◎2年後は、AL元年となる。自らの授業改革は出来ているだろうか。

■子供版研究協議会（授業見学集会）

研究授業の評価は、教師が行うものとされてきた。かつての知識を伝達するのが教師の役割であるという認識から評価もそうしてきたと思われる。子供が主体的・協働的に学ぶことが重要であると指摘されている今日、「どのように学ぶのか」を子供に、考えさせるためにも研究授業の評価に子供を参加をさせるとよい。教師が行う研究協議会の子供版等が考えられる。

子供たちは、学習発表会や学芸会等を参観する。だが、他学級の授業を参観することはほとんどない。そのため、他学級の学び方のよい手本を学べなかった。他学級の授業の様子を知り、自らの学びを振り返って欲しいと考え、子供版研究協議会（授業見学集会）を行うとよい。こうした取り組みは、全国の学校で行われるようになってきた。

○ねらい

教師だけではなく、子供たちも学習過程の方法を他学級から学ぶ。特に、言語活動を学び自己の学びに生かす。

○実際

集会の時間に実施する。体育館の中央に教室を作り、その周りを全校の子供が取り囲む。中央のモデルとなる学級の子供は、ある一つの課題について話し合いを行う。研究主任がマイクを使い、参観をするポイントを説明する。

その後、子供の司会者が学級の仲間に課題を投げかける。次々に相互指名を行い、話し合いを進めていく。

「わたしは～がいいと思います（結論）。その理由は～だからです（理由）。」

「わたしの考えは二つあります。一つ目は～。二つ目は～。（順序）」

「〇〇さんの～という意見と△△さんの～という意見を比べると（比較）・・・」

「ちょっと待ってください。〇〇さんの～という意見では～となってしまいます。だからやはり～のほうがよいのではないですか。」

「△△さんに質問ですが・・・。」

○留意点

- ・研究主任は、この授業モデルのどこを学べばよいかを分かりやすく解説する。
- ・話し方、聞き方、書き方を具体的に示す。その際、台本を作りやらせるのではなく、日常の学習の様子を見せるようにする。
- ・各担任は、示された話し方モデルを次の時間から活用し習得を図らせるようにする。

○成果

授業見学集会後、子供達から「あのよう、話し合いをしていけばいいのか」「こんな時に言語わざを使うといいのだな。」というつぶやきが聞かれるだろう。次の日から、早速モデルを真似した学び合いの授業が全学級で行われるようになる。保護者には、学校公開時に説明会を行うとよい。「家庭で子供たちに教える方法が分かった、たくさんしゃべる先生が良いと思ってきたが考えが変わった。」という反応が返ってくるだろう。